

# ジャズに魂を揺さぶられて

鎌倉淳 (高42回)

2020年は、百年に一度あるかないかといった災難  
を世界が体験し、また、私にとっても生活そのものがひっ  
くり返ってゼロになってしまった、人生で決して忘れら  
れない1年になると思います。

## 今だからこそ見えてくること

寄稿のお話を頂いた直後に新型コロナウイルス感染が  
世界中にあつという間に広がり、私の仕事も多大な影響  
を受けて全てがストップしてしまいました。今も途方に  
くれる日々ですが、自分が歩んでいるミュージシャンと  
いう仕事に、改めて深く向き合える時間をもらっている  
と感じます。何故この道を志し、どんな風に現在まで歩  
んで来たのか。そしてこれから何を目指して歩もうとし  
ているのか。今置かれている大変な状況の中でこそ見え  
てくるものがあると思います。

竜丘小学校へ転校し、緑ヶ丘中学校、飯田高校で学びま  
した。竜丘の大自然の中で遊び回り、両親の自由な教育  
方針の元で、のびのび育ちました。竜丘地区には古墳が  
多く、その周辺の畑に入っては夢中で土器を探し、将来  
は何か歴史を研究できる道に進むことができればいいな  
と考えていました。

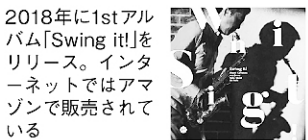
音楽に関する事といえば、洋楽を聴くのに夢中になり、  
ラジオでアメリカ、イギリスのヒットチャートを好んで  
聴いていました。ジャズを初めて耳にしたのは高校時代、  
東京に住む叔父の所へ遊びに行った時です。大量のレ  
コードコレクションの中から、叔父が何枚かの名盤を聞  
かせてくれました。その時の驚き、感動は計り知れませ  
ん。今でもよく覚えています。全身の毛穴が開き鳥肌が  
立ち固まってしまったほどでした。ジャズの大きなエ  
ネルギーに初めて触れ、こんなにパワーがある音楽だと  
身をもって知った一瞬でした。

音楽を聴いた時に耳に入るのは、音の高低の動き(メ  
ロディー)・重なる音の響き(ハーモニー)・テンポやノ  
リ(リズム)の主に3つです。演奏者はこの3つを声や  
楽器、何か音の出る物で表現します。自分がそれまでに  
聴いたことがないメロディー・ハーモニー・リズム、楽  
器の音色、それらが生み出す雰囲気魅了され、演奏者



●かまくら・あつし  
飯田市駄科出身。ジャズサック  
スプレイヤー。ジャズクラブ等  
での演奏活動の他、カワイ音楽  
教室でサックス講師を務める。  
ジャズの裾野を広げる活動が注  
目される団体「YOKOHAMA  
JAZZ EGGS」に参加。

音楽は人の魂に強力に訴えか  
け、心を豊かにする事ができる芸  
術です。音に触れて、また、演奏  
を生で見聴きし、ワクワクドキド  
キ、笑ったり泣いたり、慰められ  
て希望に満ち溢れた気持ちになっ  
たりします。特にジャズは、そう  
いった大きなパワーを持った音楽  
ですが、実際にそのパワーに魅了された私の体験を通し  
て、ジャズの素晴らしさをお伝えできればと思います。



## 東京の叔父の家でジャズに出会う

美術・音楽教師の両親から、幼少の頃より芸術に触れ  
る機会をたくさんもらいました。少しの間ですがピアノ  
を習う事もできました。小学2年の時に平岡小学校から

やその時代の人々の生き様まで聴き取れるようでした。  
ジャズという音楽に心を奪われ、いつか演奏できるよう  
になりたいという夢を持ったこの時が、自分がミュージ  
シャンとしての一歩を踏み出した瞬間だと思っています。  
今、アルトサックスを手にし、吹いているのは、あの  
時に聴いたジャズアルトサックスの巨人、ジャッキー・  
マクリーンの演奏が心に焼きついているからです。

## ジャズが好きだ！ 生業とすることを決意

飯田高校を卒業後、駒澤大学へ進学すると、ジャズ研  
究会へ入部。アルトサックスを吹き始めます。アルトサッ  
クスを吹く事、ジャズを演奏する事に取っつかれ、夢中  
で練習しました。ジャズを貪り聴き、公園や部屋でがむ  
しゃらに吹く。頭の中には常にジャズが流れ、中古品で  
手に入れたセルマーのアルトサックスを肌身離さず持ち  
歩いていました。プロミュージシャンになる覚悟が芽生  
え、活躍中だった新進気鋭のアルトサックス奏者、多田  
誠司氏に師事したのもこの頃です。本格的に音楽、楽器、  
ジャズを学ぶ傍ら、プロミュージシャンの世界、現場へ  
足を運んで、その厳しさや生々しいエネルギーに直面も  
しました。ジャズによって感情が揺さぶられ、活力が涌  
き、そして癒される、そんな強烈な洗礼を受けました。

大学4年生になると、同期生が就職活動に勤しむ中で、いよいよ私はプロの世界へ進む覚悟を固めました。が、進もうとしている道は将来の安定とは程遠く、かといって自分が演奏に優れて有望であるわけでもなく、周りの自分よりも数倍才能のある人たち、そして雲の上のプロミュージシャンの中に入っていこうとしているのですから、我れながら無謀とも思える決断でした。しかしながらただ一つ、ジャズを演奏したい、ジャズが好きだという気持ちは誰にも負けない、揺るぎないものでした。

## プロミュージシャンとしての洗礼を受ける

大学を卒業し、アルバイトで生計を立てながら少しずつ演奏活動を始めました。東京や横浜のジャズクラブ、ライブハウスへ、デモ演奏のカセットテープを送って出演をお願いしたり、お店で定期的に行われるジャムセッションに楽器を持って参加し、演奏を聴いてもらったりして、出演を交渉しました。

プロの道に飛び込んだものの、その歩み方など全くわからず、すべてが手探りでした。そもそも「ジャズミュージシャン」とは職業として一体どのような成り立つのか？単純にお金の流れだけを考えれば、興行（ライブ演奏など）を打って、集客し、入場料（チャージ）を頂

いてその中から演奏料をもらうということになります。つまり完全なる歩合制で、お客さんが入らなければ演奏料も入らないという訳です。

では逆に、お客さんが入ればミュージシャンとして成り立つのかというところではありません。お客さん、演奏者、スタッフ、全員がその時間と場所の中で心が満たされ、さらに演奏からエネルギーをもらって何かを感じ取って帰っていく。ミュージシャンのレベルの高いパフォーマンスだけでなく、空間や雰囲気創ること、それに携わる人、信頼、想い等幾つかの大切な要素など、どれ一つ欠けても成り立ちませんし、いいライブにもなりません。

こんな経験がありました。あるギタリストのグループに呼ばれ、演奏する事になりました。メンバーは5人。素敵な店で、お客さんも演奏者も楽しめる空間で、美味しい料理やお酒を気の利いたスタッフが運ぶ。そんな環境でのライブでした。満員の観客の中、メンバーのパフォーマンスも良く、良いライブになっているなど感じながら演奏していました。ライブも終盤にさしかかり、曲中のピアノソロ部分を女性ピアニストはそつなく弾きこなしたように思えました。

ところが、曲が終わり、リーダーが曲紹介を始めると、叶い、大勢の方に演奏を聴いて喜んでもらう事ができました。現在は、演奏活動と並行して、サックスの奏法やジャズの演奏技法などを教えています。

最後に、皆さんにお伝えしたいのは、ジャズに触れてほしいという事です。よく「ジャズは敷居が高くてね……」という声を聞きますが、むしろ逆です。ジャズはとても親しみやすい音楽で、知識なども要りません。

ただ、もっと楽しむための聴き方のコツはあります。ジャズの多くは譜面がありません。ある物もありますが、演奏の中にアドリブといって自由に演奏をするスペースが多いです。演奏者は自由に音を奏でてメンバーとコミュニケーションを取ります。つまり、会話です。皆さんは、誰かと会話する時、しゃべる事を紙に書いて話すでしょうか？いつでも同じ会話にはならないですよね。ジャズも同じです。時にその会話はバンドを飛び出して、お客さん、聴き手にも向けられます。内容も演奏者によって、聴き手によって、気分や場所によってどんどん変わります。どうですか？聴きたくなってきたでしょう？ぜひ、生の演奏を聴きにきてください。



2019年、ザ・プリンス パークタワー  
東京でのCDリリース記念ライブ

突然1人のお客さんが、ピアニストにこう言ったのです。「おもしろくない。あなたの演奏からは何も伝わらない。気持ちが入っていないでしょう？」。一瞬で空気が張り詰め、たちまち興が醒めていく。ピアニストもバンドメンバーも立ち尽くすしかありませんでした。が、何が起ったのか、そのお客さんが言わんとした事は何だったのかは、すぐに理解できませんでした。こういう場面はミュージシャンにとって非常にデリケートでも辛い経験ですが、「プロミュージシャン」として成り立つとはどういう事かを、この時痛烈に思い知らされました。

このような辛い、痛いエピソードも、この道の一面面ではありません。この先も様々な経験をしながら、精進しながら、自分なりの道を創り上げていくものだろうと思います。

## ジャズは会話と同じ

その後は、誌上コンペティションでの受賞、大きなイベント、有名ホテル、老舗ジャズクラブでの公演などキャリアを積み、45歳の時には、自分のバンドでCDデビューをする事ができました。ジャズの全国誌に紹介記事が掲載されて、全国のヤマハ、山野楽器、タワーレコード等CDショップの店頭に並びました。故郷飯田での公演も